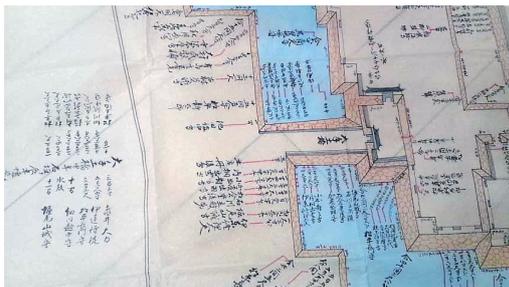


十・城郭石垣の魅力、刻まれた印

しろはく古地図と城の博物館富原文庫 代表 富原 道晴

城といえば天守、日本全国 12 の現存天守や復元整備された数十に及ぶ天守、櫓、城門に魅了され、それらは地域活性化に大きく寄与している。ただ、城郭用語で作事と呼ばれるこれら建築遺構は城郭の本来の機能である防衛力から見れば、その役割は微小である。やはり、城郭の機能の大半は普請と呼ばれる土木工事に依存する。戦国時代全国四万余の山城が構築され、末期には要所に石垣が構築された。信長の安土城に至り、総石垣の城となる。江戸時代に石の供給の関係で東日本の城郭の主体は土塁であるが、その機能は変わるところがない。学生時代、大阪にいて、壮大な石垣の城に恵まれ、城に魅せられた。

城郭石垣で卓越した遺構は加藤清正の熊本城扇の勾配の石垣、藤堂高虎の伊賀上野城高石垣、そして、数段に積まれた丸亀城が著名である。天空の城 竹田城や、類似の高取城、津和野城、岡城、備中松山城等、近世山城の石垣も素晴らしい。何より感動するのは徳川大坂城南外堀の、広大にして巨大な幅 50m、高さ 30m に及ぶ日本最大の石垣である。上町台地という舌状台地の先端を城にするために、台地続きをこの巨大な堀で断ち切ったのである。大坂城は徳川幕府の西日本の鎮城として、規模こそ江戸城に劣るものの、防衛力では日本最大の城郭である。全国に数万残る戦国時代のいかに人間の通行を妨げる規模の土塁の城から見ても、攻城兵器の発達により、槍、弓から、鉄砲、大砲に対応した、小規模で複雑な平面から、大規模で単純化された巨大遺構、その最たるものがこの大坂城巨大石垣である。全国の城郭を訪れた際には、建築物に見とれるだけでなく、是非石垣や土塁を見ていただきたい。そこには生存を賭けた知恵と工夫が重ねられている。



40年前に筆者が模写した大坂城丁場割図(大名の石垣構築分担図)



徳川幕府は西国

徳川幕府は西国



大坂城築城大名の家紋、符牒等刻印 拓本後朱入



大坂城石垣刻印「加肥後守内 谷ごん大夫 四十六人」拓本後朱入

諸大名の財政削減のため、天下普請といわれる城郭構築の手伝いをさせた。名古屋城、二条城、大坂城にはその役割分担した絵図が残されている。そして、こうした分業で構築された城には、石垣に分担を表示する墨書や刻印が施されている。大坂城では、石垣の天端といわれる最上層の石から、最下層の根石まで、石に巨大な刻印が刻まれている。40年前、これらの石垣にロープ1本で昇降し、築城史研究会の一員として刻印の調査を行った。同様の刻印は江戸城、名古屋城、篠山城、伊賀上野城等各地に残されている。さらには、大坂城の芦屋地域、江戸城の伊豆といった採石場にも残されている。小豆島の大坂築城残石公園は有名である。ただ、城郭刻印は江戸時代に始まったことではない。安土城には惟住内九という墨書が残され、各地の城郭の発掘調査で墨書が発見される。さらに、中世、鎌倉幕府が構築した元寇防塁にも国名を刻んだ石があると報告されている。

筆者は学生時代、これらの城郭を見て回り、その刻印の拓本を取って歩いた。名古屋城天守台の加藤家の巨大刻印は、管理事務所の許可を得て本丸空堀に降下し、鹿と一緒に



名古屋城「た中ちくご守石」篠山城「三左之内」大坂城「大坂城」刻印拓本

に歩き、観光客が注視する中、天守台石垣によじ登り、和紙を三枚貼り付けて、湿らせ、刻印の形を明示し、墨で形状を写し取った。今回お目にかけるのは40年前のその作品である。

CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH